

同人誌 (2017年4月号)

風 狂

風 狂 の 会

詩

食卓	原 詩夏至
男女を思考する人へ	高村 昌憲
バスツアー	なべくら ますみ
宇都宮城	出雲 筑三
月とギターと	長尾 雅樹
入学式	高 裕香
光の春	北岡 善寿

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（十七）	三浦 逸雄
-------------	-------

エッセイ

ダンスつれづれ噺	神宮 清志
----------	-------

翻訳

アラン『わが思索のあと』（三十三）	高村 昌憲 訳
-------------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年3月号）

東大駒場の
学食の
テラスで
食卓を
家族が
囲んでいる。

眼鏡にセーターの
やや太った男と
さほどは太っていない
その妻
膝には少年
隣には姉
その傍らを
脚の細長い
学生たちが
時折
通り過ぎる
教授たちも
時折
通り過ぎる
芝生では
見えない
幼児たちが
縄跳びをしている
ようである。

東大駒場の
学食の
隣の
売店の
ガラスの壁の前で
女子学生が
アイドルグループの
決めポーズを
何度も

真似している。

その
横向きの
Vサインの
隙から
東大駒場の
学食の
テラスの
虚像の
食卓が
見えている。

女性は自分の本性を知っている
できると言うことを諦める前に
やるべきことを常に定めている
わが子が幼い時だけで良いのに

男性はあらゆる仕事に関わると
全てを十分に見なくなっていく
知らず識らずに体が動き回ると
苦労したことも身について行く

思考を規制した儘円錐形に広げず
熟考の後に闘いへ赴くこともない
逆に世界を映すのは眼鏡のレンズ
損得を考えない人は出し抜かない

地位を低くする人は足りて生きる
今まで一度も気付きもしなかった
原因が生まれて成功がやって来る
後世の人がそれを良く知っていた

女性も男性も互いに謙遜を知り
充実した生涯を儉約と共に創る
それには誓うことが必要であり
思想を延長した時に確認される

ツアーの集合時間は
覚悟以上に早い
時間を気にしながら
始発から二台目のバスを目指した

五時台だというのに
停留所には既に数人の列
反対方向行きのバス停には
もっと大勢の人が並ぶ

普段は利用することのない
早朝の電車に乗って
集合駅へと着いた
ツアーガイドが掲げる行先表示の旗

友人の姿はまだない
ぱらぱらと集まってくる人たち
一人あるいは数人で
少しの緊張感を抱えて

出発は十五分の遅刻者を待ったが
誰も問題にしない
座席の空間が狭いと
顔をしかめる人はいたが

最初の観光ポイントは
満開の花と新緑に大満足して
皆時間前にはバスに戻って来た
旅なれた大人たち
次は呼び声高い今日一番の見どころ

期待したのに蕾は固く

色づいてもいない

今年はいつまでも寒いからと

いさぎよく諦めた人たち

滝桜は見られなかった

お客さん達をもっと残念に思ったのは

サービスエリアの売店にビールなかったこと

その理由が分かってはいても

因果応報が時をこえて飛んできた
石垣にりりしく立つ花菖蒲を
怨念の雨が叩いていく

天守閣はなかった
吊天井などありっこない
信ずる方もどうかしている

要するに親爺の仇を討たれたのだ
おかしい理由の方が
かえって判りやすい

どうせなら戦って死にたかった
外堀からは城は堅固だが
心の城はひとつ崩れるとすぐ墮ちる

富士見櫓から拝む富士の山
清明台からは孤高の剣士筑波山
一途なまなざしに映る霊峰は遥かなり

いまは全てを忘却してしまいたい
かつて謙信公と果敢に戦った名城よ
さらば謀略の虜たち

※ 城主・本多正純は家康の謀将・本多正信の息子

一六一九年城下町の大改造を行い、現在の宇都宮市の街並みを造る

音は何時起き出したのだろう
ギターが流れている
緩やかに

部屋には花柄の絨毯が敷き詰められ
卓上のコップには水がそそがれている
弦は静かな調子で変奏されて やがて眠る

月は笑っている
水を飲む音がして
また ギターが奏で始められた

水を注ぐ音がする
月は上天にある
音は又眠ってしまった

楽譜はそのまま澄ましている
ギターは箱の中に収まって
弦を鋭く磨いて待つ

コップは月を写している
ギターはもう鳴らない

今日から ぼくは小学1年生
制服も靴もランドセルも
みんな みんな 真っ新

おじいちゃんが買ってくれた
ランドセルを背負って
大きな正門をくぐった

桜の花が満開
小さな花びらが笑っている
みんなの顔も笑っている

講堂に入ると 大きな拍手
ぼくの名前が学校中に響いた
大きな声で「はい！」と返事した

春の光の雑木林に老人がいる
自転車を道端に倒したまま
動きそうでも動かず
腹正しい顔で何事か
木に向ってぶつぶつ言っている
明るい裸木の林の中に
鳥が騒いでいるのでもない
何も被っていない頭は染だらけ
あの艶々した光が消えている
もはや若返ることもない
枯木の己に苛立っているのか
ぶつぶつ言ったところで
時間が逆さに流れるのでも
味気ない世の中が変って蝶の舞う
花咲く楽園になるわけでもない
けれど口の中のぶつぶつは
生きている時にしか言えないから
家で役立たずの邪魔もの扱いされて
ゆっくり落ち着いていられないのが無念で
五月蠅い嫁の顔でも浮べながら
「あなうたて」と
呪うように呟いているのかも



三浦逸雄「蜜柑を剥く女」15号（麻布・油彩）

「あんたみたいに下手な人と組むと気楽でいいわ」

これはごく最近いわれた言葉である。先生とか上級の男性と組むと、緊張するけれどあんたは気楽でいい、という意味。親しみをこめた言葉である。

「まわり過ぎよ！」

ワルツの最初のフィガー「ナチュラルスピターン」を踊った瞬間、この言葉が出た。その前の週に上級者から「そんな足の使い方では回れない。こうするんだ」と、ありがたいご指導をいただいていた。その通りにするとクルリと気持ちよく回れた。帰宅後その稽古を積んで臨んだその最初にいわれて、思うように踊れなくなってしまった。この世界では弱気は禁物である。

「なによ、手をふらふらさせて！」

わたしは腕が下がるという欠点があり、先生から注意されること百回以上に及び、今もって直っていない。よってこんなお言葉をいただくのは当然である。「あ、腕が下がっているな」と踊りながら気づいて腕を張る、これがいけないらしい。

「女を振り回そうとしている！」

女性の背中に回した右手で、背中を引っ張るといふ「禁じ手」が無意識のうちに出てしまう。それを叱責しているのだ。無論いけないのはわたしの未熟さである。

「この足が邪魔よ！」

「それじゃ女性が前に進めないじゃない！」

わたしのステップの稚拙さ、あるいは体の使い方の未熟さを指摘していただいているありがたいお言葉なのだが、このようなときは頭の中が混乱して、踊りが狂いがちになる。するとますますステップごとに注意のお言葉が飛ぶ。言われるわたしの稚拙さがすべてであるが、言われているうちに見えてきたことがある。

そのひとつは、こういうときの女性は姿勢が崩れ、背中が丸くなり、踊りそのものも形になっていない。もうひとつは、こうしたお言葉を下さる女性は、初級者に多いということだ。何か教わるとそれを誰かに教えないではいられない。わたしのような新参加者が、その衝動を解消する絶好の相手となる。未熟者のわたしもこうして貢献させていただいていることになる。

その一方では、すいすいと綺麗に踊って、未熟者のこちらまで気持ちよく踊らせて下さる女性が居る。踊り終わると何かいいお言葉を下さる。リップサービスも万全である。ダンスによって人格まで陶冶されておられる。こういう女性と踊ったときは、気持ちいいばかりか、こちらの踊りが一段と上達したような錯覚を覚える。いやそれは錯覚とばかりいえない、このような経験によって向上する面は確かにある。上級者のなかにはこういう女神のような方も居られる。

オーヴァーターンというフィガーがある。これはスピターンというよく使うフィガーの究極のものである。普通のスピターンは八分の三回転する。あるいは八分の四回転する場合もある。しかしオーヴァーターンは八分の八回転、つまり一回転するフィガーである。初級者にとって

易しいフィガーではない。何度か練習しているうちに気持ちよく回れた。その時の相手は上背があって、それに七センチのヒールを履くと、身長一七〇センチのわたしとほとんど同じタツパになる。全身これ真綿に包まれるような柔らかな肉体の持ち主だった。このひとはたいへん気楽なひとで、いつも楽しく面白く踊ることが出来る。この女性と踊ってオーヴァーターンがすいと出来てしまった。二度三度と踊るうちにますます好調に回転することが出来た。その次に踊った相手がまた素晴らしかった。上背も程よくコンパスの長さがちょうどいいので、脚を思い切り踏み込める。しかも極めて協力的で気分良く踊らせてくれる。ルックスもスタイルも抜群で、張りのある肉体にリズム感も軽く、この人と踊ると心も踊る。多くの男性が同じ思いであるらしく、パーティーなどに行こうものなら席の温まる暇がないくらい引っ張りだこになって、この人と踊るのは至難の業である。練習のときは順番に回ってくるのでこの最高の女性と組んで踊る幸せを満喫できることになる。オーヴァーターンはますます冴えて、それこそ気持ちよくすいすいと出来た。このとき先生が左手を押し出すようにするともっといい、とアドヴァイスして下さった。その通りにすると「そうされると楽だわ」といってくれて、いよいよ好調に踊ることが出来た。余裕をさえもって踊ることが出来、次のフィガーにつなげることが出来た。しかし、しかし...この世はままならないものだ。

その後巡ってきた女性が厳しいひとだった。そこがダメ、それはだめ、それじゃ回れない、と次々とダメを出されて全く回れなくなってしまった。その後いかに努力してもこのフィガーが出来ない。あれほど上手く出来たのにどうしても出来ないのだ。一度崩れてしまってからでは、上手く踊らせてくれたひとと踊っても出来ない。そのとき気が付いた。こうした回転というのは軸が必要であり、その軸の出来如何で可能にも不可能にもなる、と。軸というのは自分一人の軸ではなく二人で作る軸である。組んだ二人が一つのコマのように回転するときには作られる軸、これがいかに巧く出来るかによって、踊りが決定する。あれこれ試行錯誤を重ね、練習を積み重ねたのちに、このフィガーが出来るようになったのは一年後だった。とんでもない遠回りをしたものだ。ダンスをやっている男は皆このような経験をもっており、上手な人はそれを乗り越えてきている。

いうまでもなくこうした存在は女性ばかりではない。男性にも「教え魔」「独りよがり」「天狗」と陰口叩かれている男が居る。本人は親切のつもりなのだろうが、これがとんだ裏目になってしまっている。稽古事にはこんな問題がどこにでもある。アドヴァイスするのは指導者に任せておくのが、無難にして最良であると心得ておきたい。

われわれがやっているダンスは、趣味ないし遊びであって、制約も受けないし、利害関係もない。抑制されることがないから、エゴイズムが表面化する傾向にある。勝負事には、強気と弱気、大胆と慎重といった性格の違いが明確に出る。ダンスはより複雑で、幅広い人格、生活観、趣味の良し悪し、といったものがいろいろな場面で、はつきり出てくる。まして男女が手を取り合って体を接近させているのだから、広義の人の匂いとか、人間としての微妙な襞が見えてくる。そこが限りなく面白いところである。

女性に何を言われても、男性は傷つくには及ばない。自分の精神が未熟か、心の貧困といえる。女性の生態として観察すべきだろう。思わぬ発見もあり、また反省を強いられることもある。とは分かっている、女性から厳しい言葉を受けて傷つかない男は居ないだろう。ひどく傷ついてダンスそのものから遠ざかっていった人も少なからず居る。そのいっぽうではその屈辱をバネにして、大発奮して練習に励んだ男も居る。上級者の男たちは、皆そんな経験乗り越えてきている。このことに関しては女性も同じなのだろうと推察している。

わたしがダンスを習い始めたのは、古希を過ぎてからで、それも偶然であった。七〇歳になると敬老パスが送られてきて、市営の地下鉄とバスが乗り放題になる。幸い地下鉄駅から五分くらいのところに住んでいるので、地下鉄の各駅を片端から探訪してみた。二駅先の駅の近くの「地区センター」にダンスサークルがあって会員募集をしていた。さっそく見学に行くと、ラジオ体操をしてから柔軟体操をして、音楽に合わせて歩く練習をする。それから「ブルース」と「ワルツ」を練習する。ひと汗かいたところでテーブルを出してお茶とお菓子で休憩を取りながらカラオケを楽しみ、またダンス「タンゴ」と「ルンバ」を練習するという内容であった。

これなら何とかついて行けそうだと思い、すぐに申し込んで通い始めた。初めは組んで踊ることも出来ず、皆の後ろに就いて一人で練習した。ブルースはすぐに覚えて組んで踊ることが出来たが、ほかの踊りはなかなかうまくゆかなかった。これはだめかなと思い始めていたとき「キミは踊りはだめだけれどいい声してるネ」といわれた。カラオケの唄を褒められたのだ。この言葉に勇を得て続けることが出来た。このグループの中に相当の年配者が居た。隣に席を取ってお茶を飲んだとき「昭和の生まれですか？」と話しかけると、彼は胸を張って答えた。

「大正三年の生まれだ」

これには飛び上がるほど驚いた。彼はわたしが生まれたとき、すでに海軍の飛行機に乗っていた。それも双発機の「一式陸上攻撃機」であった。飛行機で行く戦場にはすべて行ったという。オーストラリアの空爆にも行ったし、中国の奥地にも行った。それでよくぞ生き残ったものだ。すでに九〇歳をはるかに超えていたが、ダンスは十分にこなし、カラオケも毎度新しい曲を練習してくるのだった。この人との出会いはわたしに勇気を与えた。こんな年配までダンスを踊れるし、唄も唄えるという事例に出会ったことが大きかった。このサークルにはほかに九〇歳代の男性が二人居た。元海軍の飛行士は十年以上も戦地に居たのだから、おそらく大佐くらいにはなっていたはずだ。それにしても態度が穏やかでどこまでも謙虚だった。戦時中はほとんど食べることが出来なかったという話をすると、彼は十分に食べていたと本当に申し訳なさそうに下を向いた。三年ほどしてほぼ踊れるようになったころ、この会は別の会場に移り、しかも午前中になってしまい、退会せざるをえなくなった。次に行ったところは指導者はボランティアでやっていて、会場費も只という願ってもないところだった。しかし教えるのは足型だけ、踊るという基本はほとんど学べなかった。

しだいに欲が出てきて、もう少し本格的にやってみたいと思っていると、まさにそれに相応し

い指導者に巡り会った。その先生は四組の教室をもっていて、上級、中級、初級とグレードを分けて教えていた。総勢四〇人くらい居て、指導員の資格を持った者も習いに来ていた。ここで得たものは計り知れないくらい大きかった。

このサークルに入るまでは、ダンスのステップしか習ったことがなかった。「踊る」のではなく「歩く」だけだった。しかしダンスは、ホールド、腕の構え、頭の置き方、視線、体全体のシルエット、足のさばき、LOD、ヒール・ボウル・トゥで地球の引力を受け止める、腰のひねり、腹筋の吸い上げ、全身の浮き沈み、アライメント（爪先の向き）、ダイレクション（体の向き）、スウェー、スウィング、音楽に乗る、・・・これらのすべてをこなしつつ、一瞬一瞬の中に、次々と表現しなければならない。まさに聖徳太子なみの能力を要求される。凡人には至難の業である。足に気をとられれば、音楽が耳に入らない。視線とか頭の置き方などはるか先のことだ。腕が下がる、音楽に外れるという情けない状態にある。

それでもこうした難しさに気づいてきただけでも、進歩しているのかもしれない。ダンスは、その努力の結果がすぐに出る。気を抜けばたちまち崩れてしまう。今日出来たからといって、明日も出来るものではない。努力がすぐに現れるということは、それだけやり甲斐があるといえる。

始めたときの動機がそうであるように、健康法としてやっている。腕を酷使する木彫による手首、肘、肩の筋肉疲労を解消するには、足を動かすのが効果的である。ダンスはウォーキングとジョギングの間くらいのもので、足の筋肉はその付け根から爪先まで使う。ダンスは頭も使い、精神的にもいい刺激を貰える。われわれが歳を取ることの不幸のひとつは、叱ってくれる人が居なくなるということもある。もうひとつ褒めてくれる人も居なくなる。その点ではいつもその機会に恵まれることが大きい。さらに認知症の予防には「ときめく」ことが大切だという。これも大いに恵まれる。よって死ぬまで続けたいと思っている。

未熟ながら近頃つくづく思うことがある。どうも男も女も、教える方も教わる方も、ともすれば技術にばかり偏重しすぎていやしないか、と思う。わが同胞たちは何事によらず、まじめに取り組みすぎるのだ。ダンスはスポーツであるいっぽう、「美」を追及するアートの要素がある。である以上「心」がなければならないはずである。「愛と美と喜び」といった心をもって、綺麗に、リズムカルに、楽しく踊りたいものだ。（完）

物語

数年の間に二回程、大学は〈物語〉の学課を女子の授業計画に入れました。それは表面上は誠に美しいのですが、壁のように閉ざされています。狂った想像力にびっくりさせられた時は、既に経験によって規定されることはなく、このことは言うまでもないことでした。子供は、理解出来る対象について絶えず熱心に積極的に学ぶのに、このありそうもない物語を何故信じるのでしょうか。でも、信じているのでしょうか。そして私自身が、ペローやグリムや『千夜一夜物語』を読み返してみる機会を持ちましたが、何と興味深いことだったのでしょうか。こんなにも骨の折れる主題は、私には稀有なことでした。奴隷とか弱者がこの世を忘れようとしたり、自分自身を奇跡でうっとりさせようとしたりするのを私は良く理解します。この安易な推測は、それで詩も解釈したくなりますが、感動も様式もありません。何時も私には退屈に思えました。そこには世界が欠けているのであり、全てが欠けているのです。詩はその様にして至る処にあり、如何なる散文よりも真実に近いものです。そして奴隷の詩である寓話は、苦い経験に酔い、あらゆる幻想を追い出している様に何時も私には思えました。物語も私には同じ力があるように思えましたが、その意味を推測することは出来ませんでした。

私はコントの思想によって先ず当惑から脱け出しました。その思想とは、驚異は愛情の世界を如何なる方法でも少しも悪く変えなかったということです。『イリアス』や『オデュッセイア』の神々は、それ故に心の支配者ではなくなるでしょう。そして事実、自分の家の煙のことを考えただけで死にたくなつたユリシーズの後悔は、神々から来たのではなく、ペネロペの貞節も神々から来たのではありません。アレスの怒りも同様で、寧ろ神々は何も出来ないということがお分かりになるでしょう。しかしながら、詩は屢々創作と混じり合い、最初の源泉から遠く離れ、コントの思想も頼りなくなります。一種の媚薬の効果であつたデイド(1)の恋愛や、もっと適切に言うなら外からの奇跡によって始まるトリスタンとイズー(2)の愛のことを人は考えます。従つて私は、この様な二次的な詩が好きではありません。神話はこの時、現実を引き裂きます。『殉教者たち』(3)における天国の情景以上に冷淡なものは何もありません。私は詩に関して、全く違う観念を創り上げます。それは現実に最も近い人間や世界の歌の様に思えますし、詩人の現実の知覚を理解します。それによって私は、最も微妙な隠喩が詩人に提示している事物になり、詩人によって素晴らしく描かれた事物になることを何時も心に描きます。しかし私はこの手強い分析を、この状態で止めて置かなければなりません。物語の話に戻ります。そこに私は、呪文から何時も守っている感情の宝庫を見出しました。そしてこの側面から考えて見ると、善人と悪人という子供っぽい区別も、何かの真実を表している様に思いました。つまり出来事は殆ど人間を変えないということです。そして、それは青い鳥や白い雄牛によって、殆ど荒々しく表されています。どちらも動物の外観に基づいて忠実なのです。ここから出発して私は、もう一つの別のこ

とを発見しました。つまり人間は人間にとって大きな障害であるということです。人間は、障害物や距離や仕事を上手く熟します。忍耐しか必要ではありません。しかし、人間のことは上手く始末がつけられません。戦争を見れば良く分かることです。従って魔法の絨毯の話は、人間が人間を邪魔しなければ旅行が迅速に行えることを大変に良く表していました。それとは逆に、全ての魔法使いや鬼婆は自由に命令するための力を表していました。何故なら大地が全ての壁や障害物に占領されていて、勇気があっても何も出来ないのは本当であるからです。人は忠実になるしかありません。この物語の世界は余りに行儀が良いのです。私が先ず最初に見出したのは以上のことです。

私が二番目に試みた結果、ついに私の眼前にあったものを理解するようになったのは、即ち子供の最初の生活が魔法使いや鬼婆の言いなりになることです。それらは同時にあらゆることが出来ますが、あらゆることの邪魔もします。子供は全くこの実証的経験に従って最初の観念を形づくります。この様にして私は、私たちの最初の概念が全く神学的であるコントのもう一つの思想に、より多くの実体を与えました。しかし子供の生活をより詳しく追ってみると、私は持ち運ばれたり、あちらこちら転がされたり、戸や窓の犠牲になってお祈りにより全てを手に入れる子供を通して、物語の隠れた部分をもっと適切に理解出来ました。昔の世界においては、昔は確かに少しも働かなかったのは本当で、それが黄金時代を意味しています。しかし、ここでも全てが黄金ではないのです。待たなければなりません。人から好かれなければなりません。不可解な意志に服従しなければなりません。その様にして、物語の中で戯れるように見える想像力は、私たちの最も古い経験を大変正確に描き出しているに過ぎません。更に私たちは、若者たちを殆ど理解しないであくまで若者たちに逆らおうとする歳取った人々のことを考えてやらなければなりません。それ故に神学全体が私たちの前に立ちほだかっている、真実味を持っています。何故なら人々は神々を愛しているからですが、それでも屢々他のものであつて欲しいと望んでいます。人々が学んで企てるに依じて、神々から解放されるのもやはり真実です。そこから昔は神々がいたが、今は去ったという自然な観念が生まれます。何時もそんな風でした。最も近代的な宗教も古い奇跡しか当てにしません。その場所は神々のために作られたのであり、人間の形を作る場所でもあります。私は改めて理解したのですが、もっと適切に言うならそれは記念するということです。厳かな死者たちが生前に行っていたのと同様に、事物の上にも君臨し続けているということです。

しかしながら私は、宗教の全段階を未だ把握していません。神々は愛せられているのと同様に、恐れられてもいます。少なくとも恐怖の分析は、愛の分析よりも大変容易に行えます。ご存知の様に、恐怖の最初は恐いと認識することではなくて、寧ろ肉体の震えであり動揺です。そしてこの恐怖そのものが私たちを恐くさせるのです。そこから私は、山や森に出て来る形もなく眼にも見えない神々を訳もなく説明しました。想像力は見ているつもりでも、何も見ていません。あるいは神は極めて現実的なものです。それは走って逃げるのろ鹿です。何時間も森の中を独りで彷徨わなかった人々は、想像力の思いがけない喜びも良く知りません。私は二十歳の頃に、狩猟

家の友人と一緒に、時々ウール川の源流付近にある誰も住んでいない農家で、狩りはやらずに一月間過ごしに行きました。その地は森と池だらけです。人と出会うことも殆どありません。歩いて行くと木の幹が幾つも現れて来て、一度見ると二度と見ることもなく、その場所が隠れて仕舞うような結果になるばかりです。子供たちにとっては、この孤独に我慢出来ません。青年はそれに慣れますし、大人はそれに本当の恐怖を決して感じません。どちらかと言えば大人は望んだなら、恐怖を十分に感じるだろうと思っています。信じることから信じないことへ絶えず動いて行くのが、田園の宗教の特性です。そこには事実、それ程恐ろしい神々は決しておりません。森が絶えず消え、彷徨う人と動物が全く自然に混合することは、結局お馴染みの怪物しか生みませんでした。その典型がアイギパン(4)です。動物に神秘があるということは、狩をしたり身を守ったりする者の裡には殆ど気付きません。寧ろ動き回らない家畜に大変近くなったり遠くなったりしていると気付くことが理解されます。これらの考察から、神々が生理学的に論じられ得ることを私に示してくれました。(完)

(1) デイドは、ギリシア・ローマ神話ではフェニキアのテュロスの王女で、カルタゴ市を建設した。トロイアの勇者アイネイスとの恋に破れ、自殺したと言われる。

(2) トリスタンとイゾーは、ケルト伝説に基づく中世恋愛物語。

(3) 『殉教者たち』(一八〇九)は、シャトーブリアン(一七六八～一八四八)が聖地訪問した成果としての作品の一つである。

(4) アイギパンは、半分が人間で、山羊の脚と角を持った半獣神。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる

。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ 971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊、一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのpapier）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『文明国の戦争で真の原因になるもの』『神々』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと』『思想と年齢』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェュッシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。

帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（2017年3月号）

風狂（2017年3月号）を拝読させていただきましてありがとうございます。三浦さまの絵画は、見てすぐわかるようになりました。風狂で鑑賞させていただきありがたく思っています。

アラン『わが思索の後』（三十二）神々の方へ：祈る動作は、花が咲く動きと同様に自然で、平和の表現であるということ。敬虔なところや賛美の心・愛が大切ということ。また、人間嫌いは寂しいと思います。人間全体を理解して、騙されることなく希望を持つことが大切と教えていただきました。

年末に：木漏れ日の落ちる静かな木立に小鳥のさえずり、癒されますね。2月3月と続けて、親戚に不幸がありました。介護施設に入所のお義兄さんと、入退院を繰り返してのお義兄さんでした。スタコラさんは、足もお丈夫で案外幸せだったように思いました。最後の3行に感動しました。

玉手箱：面白いですね。お土産を開けるのが好きなので、年寄った今なら、玉手箱を開けてみたいですね。

拾った石：隕石落下のニュースを知りませんでした。よく分かりました。

権力を思考する人へ：最終連に共感をしました。権力者の思うままでもいいのでしょうか？

悲しみ：身近に多く馬型人間の悲しみを見せつけられています。厳しいですね。けれど、四連五連には共感しました。

アンタレス：巨星と小さいゲノムの対比が面白く思いました。まだ地球は大丈夫ですね。

梅咲く：梅の綺麗な寒い日に旅立たれたお師匠様を偲ばれて・・・（二月三月と続けて不幸がありました）能面師の世界は、全く別世界のことを教えていただきました。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)

第33号 (2017年4月登録)

<http://p.booklog.jp/book/114266>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114266>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト